

一〇七

北越奇談

六

北越奇談卷之六



北越 崑崙橘茂世述

東都 柳亭種彦校合

人物

古今の名將忠信勇武の士ハ諸軍證に審られバ略之

只ニ上杉家の実事ハ長上正言記に來女

板額女ハ加治明神山の城主長太郎越後守祐森が室古志の産

り勇力武功の名世に知る所なり

其二

酒轉童子蒲原郡沙子塚村の産今も試合跡のり即雲上

北越卷之六

山四上寺の行法印に侍せし児帝より世智知之

弥三郎が老婆伊夜日子山の世に皆おれる所も此は試合と只ニ

別傳一冊のり追て上梓とぐ

其三

玄符和尚伊夜日子山下箭射村の産なり 野州奈須野ヶ原殺

生石を呪して打碎する名僧に世に普くこれを知る

僧友梅百多々の人逆水和尚頸城の絶宗和尚 石志の二

弘智法印即身仏と稱む 野積潰海雲山岩坂に寂と

辨世岩坂のあはれと人同く世に傳へたる所也 凡のよる

万元和尚只も試合の産れのりども雲上山四上寺中

興たかひて即すなはち山の寂を実に皇都の産にてんどなき御種に
けしせも入は即すなはち自述の旅の窟を之として書あり其始のあり
まを記し多う甚に雅なる文粹にて奇説をおわしとしども
入寂の後誰のありと梓に上まるりのもめりど難渠がりて其
艸稿の字のく殘り予が家にも即元和尚自筆の艸稿一
冊と秘藏せり追て書林のありと欲と扱元和尚持守大
徳詩を賦し和歌を詠し且僧贊賢好んど狂哥俳諧をよくと
生涯の奇り甚から一即四上山阿弥陀堂を建えし山中に
家の地をえしんど隱居せり名付く五合庵と稱ぶ松竹
緑とまる石徑苔厚く遙に人跡を隔て謀に遠く支道が奥可

北越卷之六

知さくかの五合庵の近ぶら一奇僧を住ます了寛道僧と人出省
其のひくせいんぐのいびぞく其の欲法蓋外施俗の奇を賞ぶり呀たり即出て法橋氏
某の女子いく家富門葉廣一始名ハ文孝其友富取並川
彦山等と才小岑子陽先生の学ぶと總て六年後禪僧に隨
て諸圃に遊歴と其の出ると書を遺して中子に家祿を以
ゆり去り教年高門を絶と後海濱御本として呀に空菴
のりが一夕旅僧一人来り隣家にし彼空菴の宿又お日
近村に託鉢して其日の食いはらす即必ず食の事を時
へ乞食を飲めり日々のあらはす也試み半年諸人其奇を秘して
徳をそんど衣服を送るものあり即ちけくあらはすりのとます

寒子にゆゑ其居出き勝と去るに後三里時に知る人在
 必橘氏某うゝんよ代以平が兄彦山の告ぐ彦山即御幸乃
 海淡にるくかの空菴を窺ふに不居只余麻濃ととらう
 葎蘿おまといりて内けりて是を名れば机上視筆炉中
 土鶴一あり登上皆詩と題ぬあれと讀む莖外仙客乃
 情おのづこ胸中清月の并ひて生む其筆改まがく所多
 文孝うしとふ是を隣人の告ぐゆる隣人即出き勝に言
 と寄爰に家人出て奉りお侍ひわらんともれども了寛
 不随又衣食を賻れども用ゆる所なくして其餘は代返
 と後行く所成ちとど年を待くわら五合菴に住と平日

北越巻之六

の行ひ皆公実の近世の道僧なり
 その一

其四

北越の取らるる儒より只北海新渡の人 松貞吉 高田藩中
 中子子陽 地務堂の人 古今人物志 其 赤城 加納の人 東郭の人
 穀山 頸城の人 雲洞和尚 詩と善も 是余今時の人 予未知之
 子可也 和歌俳諧琴茶茶道立花音曲の人 一々奉
 いとぬめりて醫家又おぼ 画に越後法眼 吳俊明
 信雪亦其餘今時を以て道流行しと數十百人なり
 書も又名氏只古に名ある人も今流行のめらとて
 今時名氏得る人も又後世の流行のめらとてこれかん書画を

其人の好む野に依りて光彩を益す

其五

力士の相撲に越の海馨を賞新厚の人九紋龍今町の人

関の戸次才次郎の人其外頭城郡中野善右衛門立石村老長

浦原郡三条三五右衛門皆無双の丈夫なり今時又力士より

其内鎧厚のを楯戸村長徳寺とて自ら勇力の世をあらう

凡十人の力とていふと成るるど生涯只三夜力を出ししと

常ぐ人にお祭りぬ其一三条本願寺掛所に訪いでけるも

堂主僧との強力と試んて試法し長徳寺孰まに鐘高七尺三寸

と西午にさうめが独を懸るるなりなんん常しくと成り

北越卷之

かゞどとて堂前の大なる石のよ水幹ありけるに山伏入を

面子にわらぐと掲げたる小堂をめぐり奥庭より西まきく縁

さまよは是とてゆるに山一点を不落其石幹はまゝに

二尺余長五尺むかりもわらんう二十余人揃く是をつりわて

奉に送り返と謀に頂羽が鼎とめげり力もゆぞ是に異らん

予弱冠のあらわの寺にあり其勇力やんんと試法し時老

僧年已に八十にありてか情社予以對して曰老去て力も又

減しこれとも望にまをせざらん本意さうとて一銅錢字あり

と虎の庄も二本の指の背にのせ中指一本をわく上より

見とおとに忽其後二のにおまきく地に落謀に尋る歎るる

あきなりあり其力女子に傳く今己に力借不出とらり

又谷根村行先寺とくく怪力の各ありく生涯其力乃

極る町成志くどく常に是を恨とと珠に歩行甚速にして

日くれゆり三十五六里なり好で肉食きたる魚肉融る時

二單と腰に履を付く出を傍の海濱に去り魚肉をりて

飯を喫登るる以淡と出てぬる家に至るとも日未没行程往

還凡二十四里なりぬる日杉山温泉に浴一箇の徒魚拍傍

にゆが一や目の大魚肉を食ひつゝ一介の酒飲ゆと飲

使然と酔い来り一歩入るく一歩入低く独山路をる帰る

塩を煮くせする牛一ツ先に煮くゆが又向なりゆる撫る



行光寺

住僧

兩牛の

分爪を

止む



このとれそのうちうらやまひやあめさうすう
伏時其力もく皮肉の間欠さく塊をひくく十日めりう疼痛
ビートンで 豊武ねら一奉と虎と打一勢ありてむ奇なり
予密にわしに 此西力士とく一相撲ありしうあれ又
一大快ありん

其六

孝子ハ殊に稀なるものしく富貴の人ハ其名ありけれど
又貴賤ともく人の善は賞とると少きハ近世の人情なり
古に村上の小次郎 新茂田の菊女 頸城郡の僧ノ知良
皆世の舌賞に残まり其後孝女百合とく三島村田
村百姓伊六郎の女にして門出せり碓尼水町大工作ちま嫁

北越巻之六

姑母ハつらく孝なると世小毛れる所なりとも一せま化を
業のつらに遠く出くゆらると久の家貧に朝夕の烟
くぐりなる中の登り山の推或ハ人の雇れ病なりつひきなり
業のゆる一暮とて姑母と孝養一とと其心ひり所の背く
とく殊に姑母其性ともて性貪のくくする所少く礼怒り
罰とくその面ハ心悪き色をあつくとく他の人の對
てかろそめいハ姑母の暴悪をそくく近隣皆其孝ハ特
ハ姑母の邪見を怖く密に百合女の告て回夫作ちま出て
く不帰是必む汝を捨くく汝ひとり豈苦辛くか暴
悪の姑母と養育の即ありんや子ハ父母の家ハかろく他の嫁ハ

又安穩なりとて勸さすけり。い百合女を云まはす我を
捨てけり。とて姑母の即母なり。けし今去ハ姑母又誰を力
い老を養ひ自ら我才生涯夫なり。是又前世の宿業と
るひ恨なり。つるは不用なり。孝をつくり才の芳若成いと
む。後五年に夫帰リ奉り其孝貞め付一とあるとて
のノむ

其七

孝子門左衛門の荒川村の新菰田百姓五郎助の男なり
上より其至孝を賞せり。白銀七枚を賜ふ。世の美談の
らつて傳代略と。近來葛塚の豆腐を賣て業とする春松と

北越巻之六

孝ありて其妻を逐ひ一子と産し。死に其松又後の妻を
不逞幼児を背負かかす業成り。父を介抱し二使の用は
つるもぐおく其松とて。とていとも忠孝なり。味
も。色面い。益孝養をつ。又近隣と君
然んば其至孝を賞せり。東都に達し。文化ニ
の年。忽上命ありて赤くも白銀三枚を下し。終りし貴
と。賤と。其孝を賞し。のやうて金は賄り。賤をた。老
歩千万の。下。知。是至孝の徳天の然ら。し
阿誰。其家。至。使。

幸と税一担其人を召るに即此日の負を忘れざりや一
て父と小児とを介抱し居り

其八

蒲原郡釈迦塚村新六と云ふ貧民あり母はつゝて至孝実
忠類ありと云ふも家貧なりゆいれ力をこめて谷江氏に
はし妻を大に母一人家あり新六日々農をいひてす際
あること即母のりて安否を問ふ凡雪炎暑と云ふ
母と不同と云ふも母常の雷を恐るり雷電はるこそ
つらも暗夜暴雨と云ふも紀出て母の家に至り傍に侍と
其の貧乏に云ふもいと云ふも貪慾の云一息をぬり主人の家

北越巻之六

と云ふ外にのをぶと云ふ先主人並に明常の召る前にて自ら
夜をぬきて墓穴おひらきと云ふ思ふと云ふ去其さひと人
疑んて云ふと云ふの後母病で目盲依之主人にいと云ふ
家にあり母をか抱と云ふ又云ふ小耕作といふ朝に出て暮る
る其一日のつとむる所宿以母に侍りて又母育つと云ふ
新六が旁と云ふ所云知れど不時に酒食魚肉ホと云ふ即凡そ
夜日暮と云ふ論今町の市に走りて買其行程に二十余丁
と云ふ
因家妻なりと云ふに價に十銭に不足と云ふ其勞をいふ
後の母亡ぶ新六悲泣して不止終に狂依て農をいひてめが家蓋
困乏と云ふ人によりて食と云ふ又雇きて食と云ふ三年病

で茅屋に卧して口の谷に氏老之食を賜るのく不日死して卒と誄
可懸予とて其孝正也彼少おるの己は後々子孫は汝
それども不及於此一論の前の其松の孝を以て一日千金の
富を以て新六に至孝正也何れも困乏餓死を以て天孝子を
憎むとて何ぞは其松の富を以て天孝子を懸とて何れぞ
は新六を困せ。悔のうな新六備いなる新六

其九

正直の殊に多きものるれども罰の擧ぐ是を論じ賞はかくれ
るはけいなるものうるるに蒲原郡中才村百姓次郎三浦といふ
の天性の正也何れも近郷のまねく是を知り呼ぶれども先

北越巻之六

ワが四斗前の田地を父兄よりワらゆく夫婦農よりいふと
他の人に倍せり常に田畑を耕し帰るととき復た人なき所は
秋後うんご皆捨居り人其失んとば氣きり次第とて何ぞ人
のおせるといふかけの者ありんやとて文に不疑又人のおも
あれバ己が用を省くも是を以て一日大屋六斗を以て付て
市に賣る其價二や文を以て袋に入鞆に以て付とて
てよまよく家の前に至りて下りかの鈔を見れば已に
失してや家人よく立戻りて其ま鈔とるおんとて伏せ候も
と即りての及にのりしが一丁ぶかりてやがく立帰りぬ家人
同く遺鈔ありしや次第とて之の曰ふ鈔さりとて我是を失て

怨^ん人^{にん}を^を捨^すて^て去^さる^るべし^と又^{また}ある^るに^に家^か人^{にん}も^も是^{これ}を^を怨^ん
 と^と止^とぬ^ぬ又^{また}ある^る日^ひ米^{こめ}十^{じゅう}余^{あまり}俵^{はら}を^をり^り三^{さん}条^{じょう}の^の商^{あきか}人^{にん}に^に賣^う時^{とき}は^は三^{さん}商^{あきか}
 人^{にん}奉^{ほう}り^り米^{こめ}五^ご俵^{はら}は^は比^ひ珠^{しゆ}の^の外^{がわい}に^に下^{くだ}て^て先^{まづ}買^{かひ}ぬ^ぬ米^{こめ}大^{だい}に^に換^かめ^め
 と^と昔^{むかし}は^は下^{くだ}り^り米^{こめ}五^ご俵^{はら}の^の日^ひを^をい^いの^の毒^{どく}な^{なり}り^り換^かめ^めは^は方^{かた}より^{より}二^にの^の
 糸^{いと}も^も一^{いち}と^と商^{あきか}人^{にん}辭^{こと}して^{して}不^ふ受^{じゆ}又^{また}云^いふ^ふ公^{こう}も^も賣^う買^{かひ}の^の利^りを^をり^りと^と世^よ
 渡^{わた}る^るの^の分^{ぶん}接^{せつ}あり^りて^て不^ふ叶^えと^と是^{こゝ}非^ひづ^づの^の老^{らう}一^{いち}可^か伊^いと^とお^お筆^{ひつ}ふ^ふ
 不^ふ止^と終^{しゆう}に^に儀^ぎを^を作^さり^り智^ちく^く其^{その}換^かを^を補^{おぎな}ふ^ふ其^{その}余^{あま}徳^{とく}行^{ぎやう}の^のび^びく^く云^いへ^ふ
 子^こ四^よ人^{にん}あり^り皆^{みな}心^{こゝろ}直^{ちやく}至^し孝^{かう}長^{ちやう}子^し五^ご宿^{しゆく}次^じ妻^{さい}を^を送^{おく}ひ^ひく^く子^こは^は二^に男^{なん}
 八^{はち}宿^{しゆく}に^に嫁^{よめ}る^る家^か内^{うち}有^ある^る者^{もの}貞^{ちやう}和^わ順^{じゆん}鷄^{けい}犬^{けん}猫^{ねこ}子^しに^にあ^ある^るま^まが^が皆^{みな}お^お知^ち
 して^{して}不^ふ爭^{そう}食^{じき}を^を共^{ども}に^に一^{いち}地^ちを^を開^{ひら}く^く眠^ねる^る五^ご次^じ犬^{けん}と^と好^{この}んで^て四^し疋^{ふし}を^を

北越巻之六

少^{すく}五^ご次^じ外^{がわい}に^に出^でる^ると^とま^まに^に四^し大^{だい}お^お送^{おく}く^く二^に大^{だい}川^{せん}を^を越^こへ^へ地^ちひ^ひ
 二^に大^{だい}家^かに^に帰^{かへ}り^り又^{また}文^{ぶん}に^に他^たの^の犬^{いぬ}と^とお^お争^{そう}す^すて^て皆^{みな}お^お別^{わか}れて^て存^{ぞん}ず^す
 ぬ^ぬと^と二^にの^の犬^{いぬ}已^いに^に路^ぢを^を出^でて^て行^いく^くも^もは^は其^{その}常^{じやう}なり^り其^{その}徳^{とく}化^け又^{また}州^{しゅう}
 本^{ほん}より^{より}一^{いち}年^{ねん}の^の耕^{かう}作^{さく}其^{その}穀^{こく}を^をい^いる^ると^と他^たに^に倍^{ばい}せ^せり^り故^{ゆゑ}に^に家^か富^ふ
 て^て父^{ちち}次^じより^{より}一^{いち}代^{だい}の^の百^{ひゃく}に^に十^{じゅう}石^{せき}の^の禄^{ろく}を^を得^えぬ^ぬ予^よより^{より}一^{いち}年^{ねん}其^{その}徳^{とく}の^の
 と^と少^{すく}暮^{くれ}ひ^ひの^の家^かに^に存^{ぞん}ず^すい^いり^りお^お見^みる^るに^に次^じより^{より}一^{いち}年^{ねん}其^{その}資^しを^を發^{はつ}せ^せ
 姿^{すがた}童^{どう}顔^{がん}真^{まこと}の^の仙^{せん}客^{かく}成^{なり}る^るか^かは^は一^{いち}年^{ねん}未^ま已^いに^に八^{はち}十^{じゅう}二^に歳^{さい}と^とを^を得^え
 一^{いち}年^{ねん}と^とい^いふ^ふ

其十

同^{どう}床^{じやう}の^の後^ごに^に伊^い夜^や日^{にち}子^し山^{さん}海^{かい}嶽^{たつ}に^にひ^ひく^くて^て絶^{たつ}巖^{がん}亦^{また}根^ね引^ひ連^{れん}一^{いち}望^{ぼう}

數十里佐州の遠山波上とんとりさしう ちんえんをまへにうらうらとくく景色けいせきとかりきき地ちなり
漁樵さしやう凡三百余家冬暖ふゆあたたかに夏涼なつすずか一爰いよこに仁助にすけとつる壮年さうねん乃
者もののり家貧いへまるしく父母老ふかされどもつらう妻さいを不逞ひんせむ富家某ふけあの
りくは才さいを賣うり漸だくゆるく父母ふがを孝養かうようせしがるる夏の未明なつ ともみ案あん
の男おとこと後あとする山やまは宋そうを削けてありけるがめまりの暑あつさ者ものはつと
涼すずかるんとく本蔭ほんかげにまき松根しょうこんを枕まくらとしく朋輩ともだちの男おとこはつと
眠ねまりかの仁助にすけ入眠いねんするとのみど海面うみづらをうらに詠うためたり
く忽たちまち佐州さしうの方かたより赤あかき大蜂おほいばち一ひとつ飛と来きりくかの眠ねまり
男おとこの鼻はなの上うへより止とまり二ふたと夜よに左右さゆうにめぐりぐるその蜂いばち白しろ丸まる乃
穴あなの中なかへは入いり仁助にすけ是こゝを入いりてきき呼よび起おきさんとふり



仁助大峰乃
夢を買く
樹根
金とゆふ



ともめよりいよく眠ねするは今いまの蜂はちのさうさうするわすうむ
 なごうなごう目め拭ぬぐきさからんと打うち詠えいするはアア時ときをかりしその其
 蜂はち鼻びの穴あなより政せい出で又また鼻びの上うへへのびりニニとべんとべん左右さゆうにめぐり
 て忽たち羽はをふりひ海上かいじやう遙とほくを去さりぬされどもかの男おとこの男おとこの男おとこも不
 足たり仁に助すけささりかひひくくししをを起おこしし扱さちちよく眠ねる男おとこ哉や汝なんぢ去さり
 けけ射やるるくく寐ね諾だく口くちががゆゆぞぞ夢ゆめのの心こころををとと同と人ひとかの男おとこ射やりり起おこ
 ののかり目めととささりりくくむむささをを忍しのびびととああむむととつつへへ仁に助すけつつわわるる
 夢ゆめぞぞとと同と人ひと彼かれ男おとこののややとと赤あかきき衣い着きたるる老らう僧そう一ひと人ひと来きりりてて我われ
 のの仇あだ州しゅう榎えん本ほん谷や正せい光こう寺じととつつるる傍そばよりより仁に殿でんの前まへにに榎えんのの大だい本ほん
 ありその其その根ね下したのの金かねありあり是こゝととははいいささららるるややどどいいおおくく来きりりくく

掘べいおそきとれ他人のゆめけつるんまきぞと言捨くゆくろ
 夢安あよんはてなうんとり仁助夢うそんまかろ夢入お
 く人の賣かよんとくばかの男誰か夢を買ものぞと答仁助
 けれ買へべいとくかの男あつが鈔を出せ賣べきぞと安の於
 酒二升の物一つおれ仁助村の酒店にあり二升の酒をおち
 山に帰りたり夢を買入かの男大にまぢひ終に西人見と香
 してかろ叔仁助主人いづれとて乞親のりくけ立帰り一年乃
 ゆるしとゆく江戸に出かせまきく刃をさすうを殺ひ己に旅立
 の装をさす村とさるれ密ふ新深の湊より便舟しく佐州よ
 けり板本村とさるとるぬるに水津より三里北山の中へあり

北越巻之六

とくとく其の呼けつり刃れが平く正光寺とつる孫院在
 仁助即寺の赤くせんて成求む和尚まぢひ幸ひ近以僕いづれ
 ちて人をあつんとせよおちなりとくつおれ見をゆると叔
 仁助我公をつり給仕し其アリと成窺ひヨるに門前よ
 大なる板本のりく中庭皆産と一日和尚の習て回付大樹半
 朽く良材のうるべうと地産く苔のつり只切く藪と狼が
 ころりかろんくと回人和尚見をゆるも仁助人を雇へに不及
 我よりく見を根り掘さそ切んと見成終く根のまらり
 おく六と穿大本た成うそありいしくお打捨盡り又教
 同のり日和尚始寺中皆出く不居仁助ひとり箇主居して

人あまほ家窮ひ急かの大樹とありて倒さく忽盤回の根下
 一壺の金光燦然とあり仁助密に是を納時に和尚
 手あつて大樹とまりしと仁助一仁助つりつりつり曰又
 病のうらいて今日人せりて我を尋ね願く三月のい
 とはなりととと和尚其孝を感ずくゆき仁助又曰又
 砂糖を好むも家貧に飽しむるにめいどがく
 給銀せりておめりて和尚又是をゆると仁助即ち
 換一壺せりてめいの金の壺と取替りて存作りつねに便
 圓にせり是とて家富榮く今又繁昌せり

其十一

村松濱に安平とて者あり家貧にして漁業を平
 されその日汝等なりぬ一年其和波のゆきありて女房
 に向くつりて年々々々余宮の志願あれども釣の
 を以て今今今と世の業もゆるすられざる
 人づいの中乃とて伊勢の業もゆるすべし五十日
 伊勢の業もゆるすべし五十日
 と銀鏡は伊勢山田師某のりて伊勢の業もゆるすべし
 余宮の群衆その繁花つらんかて中ふも安平とて
 その勢ひ候家のとて花羨早のまて安平とて
 これとて安平も余宮の志ありぬのりぬ大衆と

行おまひてとそ目めどひさかるるべけ色よ世ひんのあまらど悲しまんわじとはく

ぐ頭かしらをひ低くてかりひ入りしる折ちやし師せん師しのの代てい来きりく安あん否ひ然ぜん

同と小せう安あん平へいいふ太たい太たい神しん樂らくと上ケけゆゆゆゆ金きん子こ竹たけやどかりゆゆゆ

そと同と小せう代だい三さん人にんはくくく七しち兩りやう二に分ぶんのと答こたふ安平へい頭づかひをあでで

金かねわらいが我われも太太たいを行んらあのとと打うち笑わらひば代だいの云内うち志しゆゆ

甚と安あんままとの金きん子こハ只今いまうなともうる一いからぶど秋あき中ちゆう出で圓えん

へまかりゆせら返かへ有あ之のにわわくの取智ち可か申まをといふにぞゆ

の心まもなくさふ太たい太たい打うち可かやといふ俄はなに師師しより衣服ふく

と出り坐をあしり其その恥ちを誅に三日じつ去し者ものともつらほほべい

扱あ奉ほう幣へい官くわん巡めぐり名所しよ見みおおホほおおとし又またとの破やぶを蓋に出しとら



捨りて
安平海中
に
金を得
たり

謀に及ぶ男がさうく家に飯も安平まで帰つてくぢりひ
 返金せられれば神罪のれがど一又家を賣とも七金あふさぬ
 され即神明の我に死を給ふとまうぶくと是借けのうを
 の名ありの代村去れも一飯の廉膳は振舞わが生前の
 ぢりひ出せざつと一子を村長の家に使せりめ女房に向て
 くれ海をいひつる魚はくも鮑はくもえ来るべ一は
 飯く膳の用さくもろべくと釣竿細くも携つ独
 海辺に出てあるとあつくと細さげ釣とらぐとくも魚一
 尾とめゆるとらぐ又海底とらぐ岩は流のりまうくね

北越巻之六

けれども野路のらとく小ゆるとは女房の内にあつくぬの
 けともまぐと膳扱など隣に借飯を炊くけけり天
 煮くとも日の暮まぐはともく帰り来くぬぬの代村
 ぢり後を押はけりしてまらとくとく其ははは
 安平日のくもそを公方をくしてあねおれども後にお
 のゆるの安平く安平つぐぢりひはくぬぬは我積悪のぬ
 けに神明の捨めつとらぐ今日己に暮く一物のゆるとら
 りはらつとら家のぬとく成ゆんととも天命のおる所才と沈
 りく死とくくと是借極ち海岸を深牙のきり可憐終り
 白波の底に巻入らう叔千るのゆき岩は流に沈くはとら

老石うきふゆに又ほくせんとして自ほひはじと岩角さう
つまされの忽其岩角と元は波上のほく出さう安平一つさ
ほくさくかの取付さう岩角とさひーのさ元れの岩さあ
でちき皮財布さう安平打琴さうの岸のあがりよさ
用きさるの黄金数百ありあまりのされさ小夢路のどく
老婦り抱をも不言家に入ら女房のさまうのゆらさあ
を静に制くらア村長の家にいさうて客人を定ひ来るべし
て押出いぬ膳と元るの飯のさのささうの一菜の用意さ
安平竊ふ膳儀備ひさうまら己いさう西入出まう一菜
いもさバど膳のつき飯を食いぬけの蓋をそれの金一西庄

平の蓋とそれバ又金あり坪の蓋と用けが口く金のり給く
又のささ其故と同一安平渡をさじ始末おく是と流
悦ひ合りと今於其家富栄く繁昌せり珠の一奇の果報
といふべし

其十二

初君寺泊の花女かり
古冷泉
為兼卿と送りまの

和教は自世の知る所さう其碑今寺泊塚所とさる人家のさ
のり

玉葉集 物さひ紙路の白波ささくさうひありととさ
其十二

柏崎中濱村の産 宦女辰子ノ傳 水原堀村百姓某ノ宮
（右ノ宮ニ入リテ）
 門詔少々今ノ世ニ傳ルモノアリハ略之

北越奇談卷之六 大尾

全部筆耕 中道

橘崑崙茂世著

北越奇談後編

續出

古番産物名所旧跡
 山勝海絶奇事
 其外此類多ク集む

同

同郡縣地理山川路程全圖

附佐州之図

寫本彩色
 一尺八尺
 大圖一枚出来

北越卷之六

二一

杜越

橘崑崙茂世著述



束邦

柳亭種彦校閱



同

葛飾北齋補畫



諸名家隨筆

温知謾錄

和心かく漢心かく四方り
 君子にこひて

書房永壽堂集刻

削 刷 氏

序文口鼠	江川留吉
一、卷	平埜治平
二、卷	江川留吉
三、卷	右同
四、卷	右同
五、卷	小泉新八
六、卷	右同